

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：12201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20272

研究課題名（和文）形式と内容の止揚を目指したICTを活用した作文ワークショップの研究

研究課題名（英文）A Study on ICT-Utilized Writing Workshops Aiming for the Sublation of Form and Content

研究代表者

高井 太郎（Takai, Taro）

宇都宮大学・共同教育学部・助教

研究者番号：70962752

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、形式と内容を止揚した「書くこと」の理論と実践を提案することであった。そのために国外の作文ワークショップとICTとを組み合わせた方法が、それらを止揚する授業になるとの仮説を立て、検証を行った。その結果、作文ワークショップの「好きなことを、好きなジャンルで、好きなように」書かせていくという特性が学習者の表現意欲を喚起し、形式と内容の往還を促すことが明らかになった。また、1人1台端末の導入により可能となったタイピング記録システムとチャット機能の活用が、形式と内容の往還を効果的に行わせる指導を実現できることも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「書くこと」の教育においては、明治期から今日に至るまで、形式面と内容面のどちらを重視するのかという論争が繰り返し生じている。そのため、形式と内容を止揚した「書くこと」の理論と実践の提案は、国語科教育における重要な課題である。これまでの研究においては、この問題を解決する視点としての歴史研究は見られるが、実践レベルでの理論や具体的な授業の提案には至っていなかった。このような背景の中、国外の作文理論を援用し、GIGAスクール構想によって導入されたICTを組み合わせ、形式と内容を止揚した「書くこと」の理論と実践を提案し、検証を試みた点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to propose a theory and practice of writing that synthesizes form and content. To achieve this, we hypothesized that combining writing workshops with ICT would result in classes that integrate form and content, and we conducted an empirical study to verify this hypothesis. The results revealed that the characteristic of writing workshops, where learners are encouraged to "write what they like, in the genre they like, in the way they like," stimulates learners' motivation for expression and promotes the interaction between form and content. Furthermore, the introduction of one-to-one devices enabled the use of a typing record system and chat functions, which facilitated effective instruction that promotes the interaction between form and content.

研究分野：国語科教育

キーワード：作文 プロセスアプローチ ライティング・ワークショップ モチベーション GIGAスクール タイピング記録システム 1人1台端末 ティームティーチング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

国語科における「書くこと」の授業は、明治期から、ジャンルや構成などの形式面と、ことがらなどの内容面を止揚することが課題となっている(菅原 2013)。理想的な「書くこと」の授業は、学習者が必要な情報を得るための形式と内容への自発的なアクセスを可能にし、作品を練り上げるための形式と内容の往還が行われるものである。しかし、これまでの作文授業では、教師がジャンルや構成(形式)、テーマ(内容)などの課題を与えることが多かった。その結果、学習者は与えられた課題に答えるために形式と内容を探し、課題を与える教師と答えを探す学習者という構図になってしまっていた。このような状況では、学習者の自発的なアクセスと形式と内容の往還は促されず、それにより形式と内容を止揚する作文授業の開発も円滑に進まなかったと考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、形式と内容を止揚した「書くこと」の理論と実践を提案することである。そのためには、下記2点の課題に応える必要がある。

- 1 形式と内容の往還過程を把握するための調査方法の開発
- 2 形式と内容を往還させる授業の構想

1つ目の課題は、学習者がいつどのように書き進め、形式と内容を往還させていたのかを把握する調査方法の開発である。これまでの調査方法では、学習者の執筆過程を十分に把握することができず、その結果、形式と内容の往還過程を捉えるのが難しかった。往還過程の把握が不十分であったため、それを促進する効果的な指導を行うことも困難であったと考えられる。

2つ目の課題は、形式と内容の往還を促す有効な授業の構想である。これまでの授業では、教師がジャンルや構成(形式)、テーマ(内容)などの課題を与えることが多く、その結果、学習者は課題に応えることに集中し、作品を練り上げる過程での形式と内容の往還が生じにくかったと考えられる。

これらの課題に応えるため、まず GIGA スクールにより導入された ICT を活用する。特にタイピング記録システムに着目し、それを使用した調査を計画し、構想した実践の中で検討する。そして、タイピング記録システムにより取得したデータの分析を通して、形式と内容の往還過程を把握する方法として有効であるかを検討する。

次に、授業の構想に向けて、世界的に評価されている Atwell (2018) の作文ワークショップに着目する。作文ワークショップは、教師が課題を与えるのではなく、学習者に「好きなことを、好きなジャンルで、好きなように」書かせる方法であり、これにより学習者の表現意欲を喚起し、作品を練り上げさせるための形式と内容の往還を生じさせることができると考えられる。

さらに、形式と内容の往還を促すために、作文ワークショップに ICT を組み合わせる。この ICT の活用により、学習者はタイピングでの執筆が可能となり、書き直しの負荷が軽減される。それにより形式と内容の両面の修正を容易に行うことができるようになる。また、教師はチャットを通じて Web サイトなどを示すことも可能となり、学習者はその具体的な情報をインターネットで探索できるようになる。このように、作文ワークショップに ICT を組み合わせることで、形式と内容の往還を促進する授業を開発できると考えている。

本研究では、GIGA スクール構想により導入された ICT と世界的な評価を得ている Nancie Atwell の作文ワークショップとを組み合わせ、「書くこと」の理論と実践を構想し、検証する。

3. 研究の方法

形式と内容を止揚した「書くこと」の理論と実践の提案に向け、「1 形式と内容の往還過程を把握するための調査方法の開発」「2 形式と内容を往還させる授業の構想」という課題に答えていく。そのために「形式と内容の往還過程を把握する調査方法の提案」「形式と内容の往還を促す作文ワークショップにおける学習意欲の要因把握」「形式と内容の往還を促す ICT を活用した作文ワークショップ実践の開発」という内容の研究を行う。

具体的には、以下1～3の調査方法と分析方法により、進めていく。

番	研究内容	調査の方法	分析の方法
1	形式と内容の往還過程を把握する調査方法の提案	「タイピング記録システムにより形式と内容の往還を把握し分析することができるのか」を確認するために調査実践を構想し、実施。	・タイピング記録システムにより取得した学習者の書く過程のデータを量的・質的に分析。
2	形式と内容の往還を促す作文ワークショップにおける学習意欲の要因把握	「作文ワークショップは表現意欲を喚起する方法であるのか」「作文ワークショップにおいて表現意欲を喚起する要因はどのようなものであるのか」を明らかにするためにアンケート調査を計	・学習者へ実施したアンケート結果を量的・質的に分析。

		画し、実施。	
3	形式と内容の往還を促す ICT を活用した作文ワークショップ実践の開発	「ICTを活用した作文ワークショップは形式と内容の往還を促すことができるのか」を検証するために調査実践を構想し、実施。	・タイピング記録システムにより取得した学習者の書く過程のデータを量的・質的に分析。

4. 研究成果

主な成果として、以上3点があげられる。

(1) 形式と内容の往還過程を把握する調査方法の提案⁽¹⁾

形式と内容の往還を分析するためには、学習者の書く過程の把握が必要になる。形式と内容の往還は、表現したい構成や表記と扱いたい情報とを吟味し、文章化していく際に生じるものと考えられる。したがって、各学習者の執筆過程を詳細に把握する方法が必要になる。

そこで考えられたのが、タイピング記録システムを活用した方法である。この調査方法は keystroke logging と呼ばれ、タイピングデータの詳細な把握が可能である。この方法による研究としては Leijten's (2014) が有名であり、書き手がいつどのように書き進めていたのかの具体的な分析がなされ、書き手の執筆過程が明らかにされている。そこで、この方法を作文授業研究に応用し、学習者の書く過程を把握する方法として有効であるのかを検討することとした。

そのために授業で書かせた作文のタイピングデータを分析することとした。授業は、北海道の国立大学附属中学校の3年35名を対象に、2021年10月に実施したものである。三省堂の教科書教材「漢字一字で表現すると」を使用し、3時間の単元展開の中で作文を書かせていった。

分析の結果、タイピング記録システムを活用した調査方法は、書き直しの過程を詳細に把握する方法として有効であることが確認された。この方法により、学習者がどのように構成や表記を修正し、情報の吟味をしていったのかという過程の把握が可能となった。また、時間情報を伴うデータの取得も可能であり、学習者がいつ執筆していたのかを把握することもできた。

この結果から、タイピング記録システムを活用した調査方法は、学習者がいつどのように形式と内容を往還していたのかを捉えることができる有効な方法であると考察した。さらに、このシステムを教師が授業中に活用すれば、学習者の書く過程をリアルタイムに把握し、形式と内容の往還を促す指導をより効果的に行えるようになると考えられた。

(2) 形式と内容の往還を促す作文ワークショップにおける学習意欲の要因把握⁽²⁾

形式と内容の往還のためには、作品の練り直しが必要となる。しかし、作文の書き直しや修正は、学習者にとって意欲を減退させる作業となりがちであり、自主的に行うことを敬遠する機会が多い。そのため、作文単元内で表現意欲を喚起することが必要になると考えられる。表現意欲を喚起できれば、自然と練り直しを生じさせ、形式と内容の往還を促すことが期待できる。

学習者の表現意欲を喚起する指導法としては、Atwell (2018) の作文ワークショップが考えられる。この指導法は学習者に「好きなことを、好きなジャンルで、好きなように」書かせる方法である。このように作文ワークショップには「選択をさせること」「創造をさせること」といった特性があり、これにより学習者の「書きたい」「やってみよう」という思いを引き出し、表現意欲を喚起することが可能になると考えられる。

そこで、作文ワークショップが、表現意欲を喚起する方法であるのか、またその要因はどのようなものであるのかを明らかにするために、アンケート調査を行い、分析することとした。調査は、作文ワークショップと教科書に基づく授業の両方を受けた学習者を対象に実施した。対象者は、北海道の国立大学附属中学校の3年104名で、教科書単元の授業は2021年12月、作文ワークショップは2022年の1~2月にかけて行われ、アンケート調査は2つの授業を終えた2月に実施された。

分析の結果、作文ワークショップは、教科書に基づく授業に比べて、表現意欲が喚起されるということが示された。その要因として代表的なものは、「ゼロから選択すること」「創造的に思考できること」であった。これは作文ワークショップの「選択をさせること」「創造をさせること」といった特性が、学習者に受け入れられ、肯定的な反応として表れたものだと考えられる。さらに学習者の回答の中には、「実際に文章を書きながら、もう一度構成へ戻って変更したり、内容を付け加えたりとたくさん工夫をしたこと」も表現意欲が高まる要因となっていたという記述が見られた。これは「形式と内容の往還」を行うこと自体が、作文ワークショップにおいては、表現意欲を高める要因になるということを示唆したものである。

この結果から、作文ワークショップは、表現意欲を喚起し、形式と内容の往還を促す方法であると考察した。特に、作文ワークショップでは、その「好きなことを、好きなジャンルで、好きなように」書かせるといった特性が表現意欲を喚起すると考えられた。さらに、学習者によっては納得の作文を書き上げたいという思いが生じ、それにより意欲を減退させがちな書き直しや修正の過程すらも、意欲喚起の要因になると考察した。

(3) 形式と内容の往還を促す ICT を活用した作文ワークショップ実践の開発⁽³⁾

形式と内容の往還を促すためには、ICT を活用した作文ワークショップが有効と考えられる。作文ワークショップには、「好きなことを、好きなジャンルで、好きなように」書かせるといった特性があり、これにより学習者の表現意欲を喚起し、執筆過程での形式と内容の往還を促すことができる。この指導法に、ICT を組み合わせることで、学習者の形式と内容の往還をより促すことが可能になると考えられる。ICT を活用すれば、学習者はタイピングでの執筆が可能となり、書き直しの負荷が軽減される。これにより形式と内容の修正を容易に行うことができるようになる。また、教師はタイピング記録システムの使用が可能となり、学習者の書く過程を把握し、適時に形式と内容の指導を行うことができるようになる。さらにその指導の際に、チャット機能を使用すれば、遠隔からのチームティーチングも実現可能となり、複数の教師が共同で指導することが可能となる。特に複数での指導は、異なる専門知識を持つ教師からの具体的なフィードバックを可能とするので、それにより学習者が自由に選んだテーマであっても、適切な内容指導を可能とする。作文ワークショップに ICT を組み合わせれば、学習者の形式と内容の往還を促す授業が実現できると考えられる。

この仮説を検証するために、1 人 1 台端末を使用したチームティーチングを取り入れた作文ワークショップ実践を分析することとした。この実践は、北海道の国立大学附属中学校の 1 年 35 名を対象に、2022 年 2～3 月に実施されたものである。授業は 5 時間の作文

ワークショップ単元で、Chromebook を使用し、執筆させたものである。指導は、筆者と相田先生（仮名）とのチームティーチングで行い、図⁽⁴⁾のように教室と図書室を使用した。筆者は教室で対面による指導を行い、相田先生は図書室からチャットによる指導を行った。

単元の経過の中で、学習者は教師の指導を取り入れ、執筆している文章への認識を深めていった。例えば、「函館の魅力を活かしたまちづくり」というテーマで意見文を書き進めていた絵里（仮名）は、チャットの指導により、認識を深めていった学習者である。執筆の初期段階では、地域の魅力についての一般的な視点は示されていたものの、具体的な函館の魅力や特性への着目が欠けており、現状認識の部分に課題が見られた。そこで「函館の魅力」についての情報を再収集させ、テーマの焦点化を図る必要があると考え、函館のまちづくりに関心の高い相田先生が、チャットを用いて具体的なウェブサイトの URL を提示する内容指導を行うことにした。その指導後、絵里はウェブサイトを読み直し、クラスメイトに対してのアンケートを実施し、情報収集を行った。このように絵里はチャット指導を取り入れ、活動し、それにより「函館の魅力」についての認識を深めていったのである。

さらにその後の執筆で絵里は、形式と内容の両面の吟味を行い、書き直しを行っていった。例えば、「考えます」を「思います」に変更するといった表記面の修正に加え、「具体的な函館の魅力」や「地域活性化の方法」といった内容面の修正も行っていった。さらに内容の修正後、アンケート結果の配置を入れ替えるなど、構成の練り直しを行っていた。つまり書き直しの過程において、形式と内容を往還し、執筆を進めていたのである。そして書き直しの結果、絵里は函館の美しい夜景、豊かな歴史、独特のグルメといった魅力を踏まえ、それらを活かした地域活性化をテーマにした納得の意見文を作成することができたのである。

ICT を活用した作文ワークショップは、形式と内容の往還を促す実践となる。この方法では、学習者が自由に選んだテーマに対して、教師はタイピング記録システムを活用して学習者の進捗状況を把握し、より適する指導者を選定して専門的かつ具体的な指導を行うことができる。そして学習者は、その指導を取り入れ、形式と内容の両面を吟味し、往還しながらの執筆を行い、納得の作品を作成していく。このことから構想した ICT を活用した作文ワークショップは、形式と内容を止揚した「書くこと」の実践になると提案される。

今後の課題は、学習者の形式と内容の往還は、どのように生じていたのかという思考過程を明らかにすることである。これにより、ICT を活用した作文ワークショップを、形式と内容を止揚した「書くこと」の授業として、理論レベルからのさらに充実した提案ができると考えている。今後も、調査を継続し、洞察を深めていきたい。

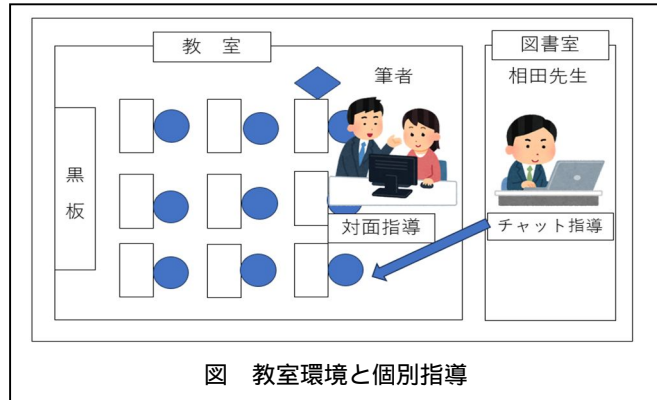


図 教室環境と個別指導

【注】

- (1) 口頭発表・高井太郎(2022)「ICTを活用した中学作文授業における学習者の実態—タイピング記録システムを用いた書く過程の把握に基づいて—」全国大学国語教育学会第144回2022年秋季大会(千葉大会)の内容を、本研究の目的に合わせて一部修正し記述している。
- (2) 口頭発表・高井太郎(2023)「作文単元における学習意欲の要因分析—トップダウン型とボトムアップ型の授業比較を通して—」全国大学国語教育学会第144回2023年春季大会(島根大会)の内容を、本研究の目的に合わせて一部修正し記述している。
- (3) 高井太郎(2024)「ICTの活用による作文授業の改善—1人1台端末を用いたチームティーチングによる作文ワークショップ実践—」『国語科教育』, Vol.95, 8-10の内容である。
- (4) 図は、高井太郎(2024)による。

<参考文献>

- 菅原稔(2013)「書くこと(作文)の教育の理論・実践史に関する研究の成果と展望」, 全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』, 学芸図書, 97-104
- Atwell, N. (2015). IN THE MIDDLE: A Lifetime of Learning About Writing, Reading, and Adolescents. Heinemann. 小坂敦子・澤田英輔・吉田新一郎編訳(2018)『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』, 三省堂.
- Leijten, M., Van Waes, L., Schriver, K., & Hayes, J. R. (2014). Writing in the workplace: Constructing documents using multiple digital sources. *Journal of Writing Research*, 5(3), 285-337.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高井 太郎	4. 巻 95
2. 論文標題 ICTの活用による作文授業の改善 1人1台端末を用いたチームティーチングによる作文ワークショップ実践	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 8~10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.95.0_8	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高井太郎
2. 発表標題 作文単元における学習意欲の要因分析 トップダウン型とボトムアップ型の授業比較を通して
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高井太郎
2. 発表標題 GIGAスクール時代における作文実践 1人1台端末を活用した作文ワークショップの授業改善
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高井太郎
2. 発表標題 ICTを活用した中学校作文授業における学習者の実態 タイピング記録システムを用いた書く過程の把握に基づいて
3. 学会等名 全国大学国語教育学会（第143回千葉大会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------